

大岡昇平「女中の子」

——「私」の〈苛立ち〉をめぐって——

谷川直美

序

大岡昇平「女中の子」^①は、『小説新潮』第四卷第一〇号（昭和二十五年九月）に発表され、『来宮心中』（新潮社、昭和二十六年五月）に収録され刊行された作品である。

夙に、池田純益氏は、大岡の代表作『野火』に「作品『女中の子』から移植されたもの」として「女中の子」（永松（野火）の原型である〈安田（女中の子）〉を指摘している。^②

池田氏が述べる通り、「女中の子」の安田の記述は、『野火』の永松の記述と酷似している。安田（「女中の子」）も永松（『野火』）も、〈二十二歳〉の若者であり、戦場のある夜、僚友に向かって自分は〈女中の子〉であると告白している。その告白の内容も、〈初めは何も知らずに育てられていたが、自分がぐれ出したら、母親から出生の話を聞かされた〉ことや、家を飛び出して〈バーテンやコックになった〉経歴、〈映画『暎の母』を観ていやになっちゃった〉経験など、かなり共通点が多い。

ただし、作者・大岡に極めて近い人物「私」（大岡）を語り手とし、作者の戦場経験を基に書かれた「女中の子」から、田村を主人公とす

るフィクション『野火』に、〈女中の子〉というモチーフが「移植された」と捉えるのは、正確ではない。永松が〈女中の子〉としての生い立ちを告白する場面を含んだ『野火』の初出『文体』稿は、昭和二十一年十二月に発表された。^③その約一年半後の昭和二十五年九月に「女中の子」が発表されている。つまり、大岡は、先に長編小説『野火』の主要人物の設定として〈女中の子〉を採用し、その後、改めて〈女中の子〉を中心に置く作品を「女中の子」と題して発表したのである。したがって、大岡において、〈女中の子〉は、単に印象的であった戦友を小説の登場人物のモデルに採用したといったレベルのものではなく、複数の作品で追究したいと思う極めて重要なテーマであったと考えられる。しかし、池田氏の指摘以後、詳細な作品論は未だ見られない。

大岡自身の自伝的事項との関係については、石崎等氏が、大岡の母親が芸妓であったことと「女中の子」との関連性を指摘している。^④ただし、安田の言葉が大岡に「母親の記憶を蘇らせるきっかけを作った」と見て、「女中の子」は「大岡の母への複雑で屈折した愛情心理」^⑤を反映した小説であると捉える解釈は、大岡の自伝的問題に重点を置くことで、作品それ自体について十分に捉え切れていないと考えられる。

小説「女中の子」には、安田の生い立ちに関する告白を聞いた「私」が、安田に対し、「女中の子がそんなに自慢なのか」、「女中の子だろ

うとなかろうと、お前はそんなけちな野郎なのさ」と、「残酷なことをいったような気がする」(②五二六頁)記憶が語られている。本作は、「女中の子」の告白のありよう、そのように告白した安田に対する、「私」の抑制できない強い〈苛立ち〉を示した小説である。本稿は、小説「女中の子」における「私」の安田に対する特別な〈苛立ち〉について、大岡が同時期に書いた他の短編小説や『野火』における記述との関係を踏まえ、考察することとする。

一 語られない鎮魂的感情

本稿が「私」の安田に対する〈苛立ち〉に注目する理由として、大岡の亡き戦友を扱った他の作品群と比較した時、「女中の子」では「私」の安田に対する鎮魂的感情が語られていないという特徴がある。

「女中の子」が発表された昭和二五年前後、大岡は、『俘虜記』の各編や、戦場の経験を基にした短編小説を書く中、戦死者の鎮魂に関する記述も多く行った。この大岡による戦死者への鎮魂の表現については、先行研究によって確実な成果があげられてきた。例えば、花崎育代氏は、「大岡は「同じ原因によって死ぬ人間」を全的被害者とは考えないというところに立」ち、戦後社会を生きるべく「社会化した「私」の論理によって困難かつ抑制され」た形をとった上で、「死んだ兵士たちやよく戦った兵士たちへの鎮魂的感情」を書いたと指摘している。あるいは、林姿瑩氏は、大岡の戦争小説について「戦場で亡くなった僚友のエゴイスチックな言動を暴くのみならず、その本来の姿を見出すことによって彼らを再評価し、彼らを鎮魂するという描き方」を指摘している。

例えば、小説「襲撃」⁽⁸⁾は、天皇陛下万歳を唱えて戦死した小林衛生

兵に焦点を当てている。そこで「私」は、小林衛生兵は個人的に「孝行とか勤勉とかいう道徳律があつ」たから「政治の欺瞞が真実となった」(②四八六頁)と分析し、小林の最期について詳述している。大岡は、「襲撃」の結末部に「私は兵士となつて以来、自分と同じ原因によって死ぬ人に動かされたことはない」(②四八八頁)と断っている。しかし、『俘虜記』の「西矢隊始末記」でも、小林衛生兵の最期について、感情的表現は控えつつ、特筆すること、鎮魂を表現している。⁽⁹⁾あるいは、「靴の話」⁽¹⁰⁾には、戦場で死んだ僚友の靴を取って行くことになった「私」が、俘虜収容所に来てから、「死んだ僚友を思い出させる鮫皮の靴をはいているのが重荷になり」、「懐かしいから穿きたくない奴もいる」と言つて靴を「埋め」た(②三五三頁)話を書いている。また、「食欲について」⁽¹¹⁾は、異常な食欲が印象的であつた亡き戦友について、「私は彼等が食欲のために他より幸福であつたと推測するのは、私が彼等が幸福であつてくれればいいと思うからである」(②三六二頁)という一文で作品が結ばれている。

一方、「女中の子」では、「私」は、安田が分隊長に余分な荷物を負わされ、「その荷物のために落伍した」と推察し、「最後まで彼は己れの上にいる者に、反抗することが出来なかった」(②五二七頁)と語る。「私」は分隊長の犠牲になった安田を幾分慮っている、と解釈することもできよう。しかし、安田の話はそこで終わり、本作は俘虜病院にいる「私」自身の話によって結ばれる。したがって、先に例示したような、他の作品における亡き戦友の最期に関する記述の分量や、その戦友に対する好意的な表現に比べれば、安田の最期は冷淡に語られており、「私」の鎮魂的感情は示されていないと言える。

大岡は、「忘れ得ぬ人々」⁽¹²⁾において、「私」は高校時代の友人の死を聞いても「別に書こうとは思わない」と述べ、「死んだ戦友だって」「平

凡に死んでしまった」と言える(②五六四頁)のだが、「何故、その時見た人々のことをこう私は書きたいのか」(②五七七頁)と、「私」の中に「死んだ戦友」を特に書きたい気持があることを書いている。しかし、「女中の子」は、「私」の安田に対する強烈な〈苛立ち〉を語る一方、「私」の安田に対する鎮魂的感情を語っていない。このことは、大岡の亡き戦友を扱った作品が、単に戦死者のことだから、彼らへの思い出や鎮魂的感情を語っているわけではないことを、物語っている。「女中の子」の特徴は、大岡の亡き戦友を扱った作品において、その戦友の何が注目され追究されているのかという個別具体的な問題が大切であることを、改めて意識させるのである。

それでは、「女中の子」が示している「私」の安田に対する特別な〈苛立ち〉とは、一体どのようなものであろうか。

二 阿諛者に対する批判

安田は、〈女中の子〉としてよりも先に、「阿諛者」として登場している。「私」の阿諛者・安田に対する批判の厳しさについて、分隊長に対する批判と比較して考えたい。

分隊長については、「その徹底した下士官的狡智については、私は別に色々の作品で書いて来ている」(②五一九頁)とある。大岡は、特に『俘虜記』の「パロの陽」^⑬の中で分隊長について詳述している。この分隊長の描かれ方については、花崎育代氏が、「大岡は分隊長のマイナス面のみならず功績も記し、「私」——自分も戯画化し、「人物を多面的に慎重に考察した、その上で、嫌悪を明示し、対象とする人物を戯画化」している」と指摘している。^⑭同様の特徴は、「女中の子」における分隊長の描かれ方にも認められると考える。すなわち、「私」は、分隊長

の「徹底した下士官的狡智」や「エゴイズム」を指摘する一方、分隊長は「かなり正しい世間智」があり、時に「正確な対世間的判断」を行っていたと認めている(②五一九～五二〇頁)。

この分隊長の語られ方と比べると、「私」は、安田については、安田本人の長所は語らないまま、阿諛者としての性格を批判していると見える。

例えば、安田は、戦場において、「一般の兵隊より一段格が上」と見なされていた炊事兵に「おべっかを使い」、「進んで手伝」いもし、炊事兵の欠員の「後釜に据ることに成功」する。安田は、炊事兵として自分が特権的立場に立った途端に「威張り出し」、「炊事場附近の逍遙者に、一人前の罵詈雑言を浴せかけ」、「以前の同僚」であった「私」達に「ちよつとの杓加減で飯を多く分配するのにも、変に恩に着せる風がある」(②五一八頁)。その安田の態度は「甚だ憎い」が「馬鹿に構うな、ということと虫を収めてしまう」のは、「我々は多く三十を越した中年の兵で、若僧を本気で相手にはしていない」からであったという。このように、安田は、自己の立場を良くするべく気に入られたい相手に阿諛する一方、いざ自分が特権的立場に立ち、見下せると思った相手に対しては露骨に横柄な態度を取る阿諛者であった。その安田に対し、「私」だけでなく他の中年の兵士も反感を抱いていたが、「本気で相手に」しても仕方ないという諦めによって、安田への憎悪を抑え、仕返しはせずにおいたという。

米軍の上陸により炊事兵の任務が消滅すると、安田は分隊長に阿諛する。そうした状況の中、「私」はマラリヤで高熱を出したが、安田は、分隊長が「私」に水を飲ませないことに追隨する。「私」は、分隊長の傍にいる安田に見下ろされる状態で、水を入れた水筒を抱いて匍う経験をする。しかし、「私は別に屈辱を感じたわけではない」し、

「私は別に彼を憎んだ記憶はない」と語る。

私も阿諛することがある。それにはまた私一個の理由があつて、そういう私を人がどういう眼で見ようと、私の知ったことではないのである。安田には安田の理由があるであらう。ただ私が彼の阿諛の必要の結果直接害を受けるといふだけの理由によつて、彼を憎んでみても始まらないのである。彼の犠牲者全部の名によつて憎まねばならぬ。しかし私以外の犠牲者は私の知った事ではない。

(②五二二頁)

右のように、「私」は、「私」自身も利己的な面があるから、安田の利己的言動によつて「私」が直接被害を蒙つたという理由だけで憎悪しても仕方ないという理屈により、安田に対する憎悪を抑制している。つまり、「私」は、「馬鹿」な「若僧」を「本気で相手に」しても仕方ないという、他の中年の兵士も抱いていたのと同じ諦めや、「私」自身にも利己的な理由で阿諛する面があるという自省によつて、阿諛者・安田に対する憎悪を抑制している。この「私」の自制には、安田について公平性を保とうとする姿勢が認められる。ただし、分隊長についてはプラスとマイナスの両面が語られていることと比較すると、安田本人のプラス面は語られていない点が注目される。「私」は、阿諛者である安田について、安田本人の長所を語らないことで厳しく批判しているのである。

大岡が阿諛者に対して比較的厳しい批判を書くというのは、他の作品にも見える特徴である。特に「暗号手」⁽¹⁵⁾には、「私」と阿諛者であった亡き戦友・中山との関係が描かれている。

「暗号手」では、所属する小隊で唯一の暗号手であつた「私」が、中山を「私」の代理として育成することになり、「私」と中山の関係性が変化していく経緯が語られている。「私」は初め、内地で身につけた「会社員の智慧」によつて暗号手の地位を独占し、「軍隊内で無邪気な上官に阿諛して、多少とも快適な地位を得る」ことも「容易」(②四六七頁)と考えられた。しかし、「私」は、戦地で「不幸な智慧を働かせたくなかつた」といい、「生れついたままの一夢想家として死のう」という思いもあり、代理を養成しようと考ええる。「私」は、インテリであつただけでなく、「幾らか文学を解した」(②四六八頁)点で親近感があつた中山を、代理の暗号手に推薦した。その後、中山は、いざ代理暗号手になると、上官に積極的に阿諛することを出世し、「私を押しつける風」(②四七二頁)な態度を取る。「私」は、中山が「正確に私が捨てようとした会社員の智慧を、積極的に活用しようとしている人物」で、「私が直接その被害者とならねばならなかつたのは皮肉であつた」(②四七三頁)と思う。その後、いよいよ戦局が悪化すると、中山は再び「私」に近づこうとしたが、「私は彼の何かものいいたげな様子をわざと無視し、ただ笑つて遠ざか」ることで「復讐」(②四七五頁)したという。このように、「私」は、阿諛によつて出世しようという「会社員の智慧」を使つて「私」を裏切つた中山について批判し、「私」が中山に「復讐」したいと思うような反感を持っていたことを語っている。「私」は、「中山の会社員気質を」「幾分意地悪く書いた」のは「多分今なお私の内にある会社員気質と、文学という悪い根性のさせる業である」(②四七五頁)と、自省を語ること、中山を一方的に非難しないようにしている。ただし、「私」は中山本人の長所を捉えて語らないという点で阿諛者である中山を厳しく批判している。阿諛者について「私」がその人物の長所を語らないという意味で

厳しい批判を行っているという点は、中山の語られ方と安田の語られ方に共通している。

しかし、「暗号手」の結末部では、「私」は、中山が「会社員の智慧」によって自己保身に走ったのは「単なる防禦にすぎなかった」(②四七五頁)との理解を示す。そして「中山の霊よ安かれ」という鎮魂的感情を表わす言葉によって作品は結ばれる。一方、「女中の子」では、先述したように、「私」の安田への鎮魂的感情は明示されないまま終わる。したがって、「女中の子」における「私」の安田に対する〈苛立ち〉は、阿諛者に対する比較的厳しい批判という以上の意味を示していると考えられる。その「私」の〈苛立ち〉の意味は、安田による「女中の子」の告白を聞いた「私」の「不快感」(②五二五頁)に注目し追究することで、見えてくるのではないか。

三 「私」の安田に対する〈苛立ち〉

安田による「女中の子」の告白を聞いた「私」の感想は、次のように書かれている。

内心の感情は一種の不快感であつた。／「女中の子」についてはストリンドベルヒの告白で飽き飽きしている。天が人の下に人を作らなかつた以上、誰の腹から生れようと人には変りはないはずである。「女中の子」の告白は、要するに自己の劣等感を環境に仮託して、自己を正当化しようというさもしい料簡を秘めている。／阿諛者である安田の性格と彼が女中の子であるという事実と、何か関係がありそうで実はないのは、告白する彼の調子に、普段のおどおどした物腰とは打ってかわった、ふてくされがあること

にも表われていると思われた。女中の子でなくても人はぐれもするし、阿諛者にもなるのである。

(②五二五頁)

右のように、「私」は、安田が「女中の子」としての生い立ちについて話した時、「告白する彼の調子に、普段のおどおどした物腰とは打ってかわった、ふてくされがあ」つたと見ている。確かに、例えば、安田は、母親に出生の事情を明かされて「癪にさわつたから」(②五二四頁)家を出ていたが、微用のため一旦家に戻つたという話をした時、話を聞いてくれていた兵士に向かい、「一度出た家なんていつかれるもんじゃねえ」、「お袋はいちいち皮肉をいやがるし」(②五二五頁)などと言っている。こうした安田の態度には、「私」が言うように、「普段のおどおどした物腰とは打ってかわった、ふてくされ」が窺えよう。しかし、「私」が回想する「安田の話に、彼が「ぐれた」理由を「女中の子」としての生い立ちのせいにする発言は、あくまで直接的明示的にはない。また、安田の告白それ自体は、安田が「私」や他の兵士に対して露骨に横柄な態度を取った時とは違い、他者に何か直接害を与える言動でもない。それでも、「私」は、安田の告白に、自己の劣等感を環境のせいにして自己正当化を図る態度を見出し、そうした態度を強く嫌悪する個人的価値観を語っているのである。

続けて、「私」は「駐屯生活の閑暇で自分の過去を検討し、それらが現在の私と何の関係もないのを発見した」(②五二六頁)という。さらに「そういう検討の結果を誌した日記」を「虚偽のエゴイズムの結果が、私より生き残るのは何となくいやであつた」から破つたと語る。この記述は、単に「軍隊で自分の出自など関係ない」という「私」の態度を示しているだけではない。「私」は、安田の「女中の子」の告

「白」の仕方に強い拒否を示してきた。その一連の流れにおいて、「私」は日記を破ることにした話を語り、「私」自身は自己正当化のために過去を語るような真似はしないと主張しているのである。そうして「女中の子」の告白」の仕方に拘る「私」は、安田に日記を渡して燃やさせた時のことを、次のように語っている。

「ちゃんと燃すんだ。みんな火の中へ入れろ」と私は怒鳴った。／安田に私の気持がわかるはずはないが、下士官のように居丈高に怒鳴る私の語調には、阿諛者を機械的に動かすものがあつたのであるう、彼は案外素直に私のいうままに、紙きれを集めて火の中へ入れた。告白を終わってしまうと、彼はまたものおどおどした、人のいうなりになる習慣を取り戻していたのである。／私はそれに苛立った。小屋へ上り傍でもぞもぞしている彼に向つて、言葉は憶えていないが、残酷なことをいったような気がする。／「さっきお前は女中の子だつて威張つていたが、女中の子がそんなに自慢なのか。そいつをいっちまわねえじゃ、往生出来ねえのか。よく考えて見ろ。女中の子だろうとなかろうと、お前はそんなけちな野郎なのさ。ただの少年工のぐれたのさ」／私は脇腹に痛みを感じたような気がする。彼が鉛筆の先で突いたのである。彼の私に対する憎悪は、その芯の先が二つの木片と共に折れて、私の腹中に残るほど強かつたのである。

(②五二六頁)

右のように、「私」は、「女中の子」の告白」を話していた時には「ふてくされ」ていた安田が、「私」に威圧的な態度を見て取ると「おどおどした、人のいうなりになる習慣を取り戻して」対応したことに

「苛立った」という。「私」は、安田の「女中の子」の告白」に劣等感を過去のせいにして自己正当化しようとする態度を捉えて嫌悪したことで、安田の阿諛者としてのありようを一層悪く受け止め、抑え難い〈苛立ち〉を感じている。「私」が安田に発したであろうと思ひ出している「残酷な」言葉は、阿諛の性質には直接触れず、〈女中の子〉としての生い立ちを「威張つて」「自慢」する態度に対する非難となっている。「私」は、自己の劣等感を正当化するために自分の過去を語る態度が見えた〈女中の子〉・安田に対し、ただ阿諛の性質を批判する時にはまだ行えていた感情の抑制も出来ず、〈苛立ち〉を露わにしている。そして本作は、安田への鎮魂的感情が明示されないまま終わり、自己正当化のために自分の過去を語る態度を嫌悪するがゆえの「私」の〈苛立ち〉が際立つ作品になっているのである。

四 「私」の〈苛立ち〉の執筆背景

「私」の安田に対する関心は、安田の生い立ちそれ自体についての興味や共感ではなく、安田の「告白」の仕方を問題視し嫌悪する感情として示されている。したがって、本作と大岡自身の生い立ちに関する著作との関連性を考えるのであれば、〈芸妓の子〉・大岡と〈女中の子〉との自伝的事項の類似性よりも、大岡が自分の過去の捉え方や語り方において拘っていた点について考える必要がある。

大岡は、「女中の子」発表から約一年後に、「母」⁽¹⁷⁾(昭和二六年六月)、「父」⁽¹⁸⁾(同年八月)を発表している。この時期特に、大岡は自分の家族に関する問題を小説化して検討していたと言えよう。「母」において、「私」は、一二歳の時、友達が発言を通して母が芸妓の出身であることを知ったが、「私は、その頃母の結婚前の職業を見抜いていて、別

に打撃も受けなかった」(③四六五頁)と語る。しかし、「母」の発表から約二〇年後に発表された自伝『少年』¹⁹⁾において、大岡は、「母」執筆の際、実は「この辺のいきさつを書くのがあまり辛いので」、「話をちよつと劇的にごまかした」(⑪二二八頁)と明かす。実際は、大岡自身が友達に頼んで母が芸妓であったことを確かめ、「私はやはり打撃を受けていた」(⑪二二二頁)という。六四歳の時に発表した『少年』において、四二歳の頃に書いた「母」には書かなかった心の傷を明かしたというように、〈芸妓の子〉の問題は、大岡において生涯に渡り省察された問題であった。しかし、大岡は、単に境遇についての執着を強調しているわけではない。

改めて小説「母」を見ると、「私は母への愛慕の情から、自分が芸妓の子であることを誇っている」と、「私」の「不条理な誇り」(⑪四七八頁)が強調されている。大岡の「母」には、母親に関する過去や境遇について卑屈に捉えて語ることはしたくないというプライドが窺える。

さらに『少年』では、母の出身と、父の職業が相場師であったことに關する問題とを合わせて、両親が「芸妓だつて、相場師だつて、恥じる必要はない、という教育」をしていれば、「私は人間と社会について、すべてをその根本条件から考える習慣がついたかも知れない」(⑪二二六頁)という。すなわち、大岡が親に關して幼少期に傷ついたことを告白した『少年』も、自分の境遇を卑屈に捉える話にはならない。むしろ親の職業を「恥じる必要はない、という教育」への願望、さらに職業差別の背景にある人間社会の根本を考えたい思いを語っているのである。

以上のように、大岡の母親に關する自伝的作品において重要なのは、単に母子關係に關する拘りではなく、自分の境遇を卑屈に捉えない姿勢であった。その姿勢こそが、「女中の子」における、自己の劣等感を

境遇のせいにする態度に關する「私」の特別な〈苛立ち〉に通じている点であると考えられる。

大岡は、「忘れ得ぬ人々」²⁰⁾において、「私自身は告白の要求から既に何百枚か戦場の経験を書いたが、今日読み返してみてもあまり自分を正当化しているのに、いや気がさすことがある」(②五六七頁)とも書いている。したがって、大岡において、自己正当化を図って過去を語る態度は、生い立ちに關する話でも、戦争に關する話でも、まず人のあり方として注意すべき重要な問題であったと考えられる。

吉田瀬生氏は、『俘虜記』を取り上げながら、大岡にとつて軍隊が「一般社会と隔絶した、独自の価値を有する世界でもなかった」²¹⁾ことを指摘している。大岡は、「異常な事件や環境におかれた人間を、出来るだけ日常な観点から考え」、「外部的な事件に動かされつつも、その中に動かないものをつかむ」(⑭四二頁)²²⁾ことを志して、『俘虜記』を書いたという。『俘虜記』には、例えば、「旧日本兵が一般に「生キテ虜囚ノ辱シメヲ受ケズ」という戦陣訓に忠実であったのは、ただ欺されていたからだと考えられている」が、「もし人が人の前に屈するということと自体、個人的屈辱と感ぜられないならば、こういう觀念が遵守されるはずがない」(②二六〇頁)²³⁾と書かれている。このような俘虜の恥に關する記述について、花崎育代氏は、「人間としての「恥」を人間のあり方を考える一尺度・一視点とすべきだ、という宣言」が提出されていることを指摘している。

以上のように、大岡は、戦時の問題を戦時の環境によるものとして片付けず、人の根底にある認識や態度を追究しようとしていた。そして小説「女中の子」は、根本的な人のあり方の問題として、「私」が自己正当化のために過去を語る態度に關して特別な〈苛立ち〉を感じingことを物語っているのである。

五 小説「女中の子」が物語るもの

戦地で駐屯生活を送る兵士を「一般社会におけると同じエゴイスト」(③六頁)と表現した『野火』にも、戦争を日常社会の延長線上に捉え、人のあり方の問題を追究しようとする大岡の姿勢が窺える。その『野火』は、序で言及したように、大岡が〈女中の子〉というモチーフを採用した最初作品である。

本章では、『野火』と小説「女中の子」における〈女中の子〉の描かれ方を比較し、大岡における〈女中の子〉というモチーフの意義を考え、小説「女中の子」が物語るものについて明らかにしたい。

「女中の子」は、単に安田の設定が『野火』に登場する〈女中の子〉・永松と酷似しているというだけでなく、衝撃的な記憶の語り方という点でも『野火』との関連性を思わせる。『野火』の最終三章では、田村が、永松を「撃ったかどうか、記憶が欠けている」(③一二四頁)がおそらく撃ったであろう事件の後、病院に運ばれるまでの経緯について、一旦記憶を喪失していたという事情が語られる。そして田村は、「米軍の野戦病院」において「頭蓋骨折の整復手術の痛さから」「我に返り」「次第に識別と記憶を取り戻し」(③一二四頁)で日記を書き、推理と追想を続けていたのであった。そうした『野火』の記述との繋がりを思わせるように、「女中の子」では、「私」が安田に関する記憶を一旦喪失して回復した経緯が語られている。「私」は、俘虜病院に入ってから間もない頃、脇腹にある傷が「いつどうして出来たか覚えがな」かった(②五二四頁)が、米人の外科医に脇腹から鉛筆の芯と木屑を取り除いてもらう「拷問の苦しみ」を経て「じつくり反省しているうちに」(②五一六―五一七頁)安田との間に起きた出来事について思い出す。「私」

が安田に対して「女中の子がそんなに自慢なのか」「女中の子だろうとかなろうと、お前はそんなけちな野郎なのさ」(②五二六頁)などと罵倒した時、安田が「私」の脇腹を鉛筆で突いたのであった。それを思い出した「私」は、安田の「私に対する憎悪」は鉛筆の芯が「私の腹中に残るほど強かったのである」(②五二六頁)と語っている。衝撃が大きい余りにむしろ一旦忘れていた〈女中の子〉・安田に関する「私」の記憶が、米軍の病院で受けた治療による激しい痛みを経て、再び反省を続けるうちに想起される――この設定は、『野火』で〈女中の子〉・永松を(おそらく)撃った後の記憶について、田村が一旦喪失して回復していく過程と酷似している。したがって、大岡において、〈女中の子〉は、一旦記憶を失って激しい痛みと共に想起するという程の衝撃的な体験や強烈な負の感情を描くことと結びつき、かつ複数の作品で描き分けて追究したいと思われた、重要なモチーフであったと考えられる。その上で、「女中の子」の特徴は、「私」の激しい〈苛立ち〉と〈女中の子〉・安田の憎悪とが衝突した事件それ自体が、「私」の記憶喪失と回復の対象になっている点にある。このように、「私」の記憶に関する設定や作品の構成によっても、「女中の子」は「私」の安田に対する〈苛立ち〉の強さが際立つ作品であると言える。

同様に、『野火』と「女中の子」における〈女中の子の告白〉の書かれ方についても比較して考察したい。

先に『野火』について、永松が〈女中の子〉としての生い立ちを中年兵士・安田に告白する場面から考えることとする。永松と安田との掛け合いの中で、永松がどこかを〈飛び出した〉経緯が三回書かれている。一回目は、永松が出生の事情を知らされた時に「かっとなつて俺あ家を飛び出しちゃった」(③二七頁)と話している。その後永松は職を転々とした話も続けたが、聞き手の安田は「ふーん、結構じゃねえ

か」と、軽めにあしらう返事をする。二回目は、永松が実母を訪ねたが邪険に扱われた時に「俺はかあつとなつて、そこを飛び出しちゃつて」(③二八頁)と話すと、安田が「よく飛び出す野郎だ」と返す。この安田の返答があった後に、もう一度、永松が映画『瞼の母』を見たが「いやあになつちやつて」「飛び出しちゃつた」ことを話し、その後は「暫く沈黙が続いた」(③二八頁)。以上のように、『野火』では、〈女中の子の告白〉は、永松の話に対する安田の返事の仕方により、真面目になり過ぎない調子で語られている。特に、永松が二度目に〈飛び出した〉話をした時に安田が「よく飛び出す野郎だ」と、いわばツッコミを入れた後、もう一度永松が〈飛び出した〉話をし、三段落ちが作られている。そのように、〈女中の子の告白〉が、ユーモアも感じさせるように構成され語られた後、今度は、安田が女中に子供を生ませた者であることを告白する。その二人の様子について、主人公の田村は、「この若い気の弱い女中の子が、シニクな女中強姦者の養子となつたのを了解した」(③三〇頁)。つまり、『野火』における〈女中の子の告白〉は、田村によって、永松と安田が疑似親子関係を結ぶことになった機縁として捉えられている。田村は、「この動物的な軍隊の余剰物の中に、まだこういう劇が行われる余地があるのを意外に思」い、「この速成の親子の辿る運命を知りたいと思」ったが、「それは何という結末であつたらう」(③三〇頁)と語っている。すなわち、永松と安田は、最後には互いに殺して喰いたい気持ちで争う破滅的關係に至る。田村は、その疑似親子關係の破滅を目の当たりにする。さらに、精神病院に入つた後、妻との關係も信じられなくなっている田村は、「人間がすべて分裂した存在である」と言い、「分裂したものの中に、親子であろうと夫婦であろうと、愛などあるはずがないではないか」(③一二六頁)と思う。田村は、戦場という極限状況で結ばれた人間らしい關係

の象徴として、永松と安田の疑似親子關係に關心を持っていた。それゆえに、永松と安田の關係が破綻したことは、田村によって、人間關係全般に対する絶望、徹底的な愛情不信を感じさせるものとして語られているのである。

以上のように、『野火』は、〈女中の子の告白〉を、ユーモアも含むように構成し、永松と安田が疑似親子關係を結んだ機縁として提示している。その疑似親子關係の破滅は、田村における人間らしい關係への關心と追究が、人間關係についての徹底的な不信に行き着くという、作品のテーマに繋がっている。このような『野火』における〈女中の子の役割を踏まえれば、小説「女中の子」は、やはり、「私」自身の〈女中の子〉・安田に対する〈苛立ち〉それ自体が中心になっている作品であることが鮮明になると考えられる。

「女中の子」において、安田が告白を始めた時、周囲の「分隊長ほど心に余裕のなかった兵士達」は「安田が敵が上つたという最後の瞬間、こういう打ち明けをする気になつたという事実」に、一種の衝撃を受けたようである。「みな真面目な顔が安田に向いていた」(②五二四頁)。このように、いよいよ戦死の可能性が迫り、安田は彼の生い立ちについて語りたい気持ちになつたらしい、といった真面目な雰囲気で作られた上で、〈女中の子の告白〉が語られる。その告白において、安田がどこかを〈飛び出した〉経験は二回語られる。まず、安田は出生の事情を聞かされて「家を飛び出しちゃつた」話をするが、それに対して分隊長は「それはよくねえようだな」と「幾分真面目にいった」(②五二四頁)。その後、安田は映画『瞼の母』を見続けるに堪えなかつた時にも「飛び出しちゃつた」と話すが、その直後に続く聞き手の反応は「家へ帰らなかつたのか」と、ただ安田の話の続きを聞き出すものである。このように、安田の告白は、聞き手の構えや返答の仕方により、あく

まで真面目な雰囲気において語られている。〈飛び出しちゃった〉というフレーズが繰り返されているが、『野火』の場合のようなユーモアの効果はない。そのように〈女中の子の告白〉の場面が真面目な調子で記述されていることは、「私」の安田に対する特別な〈苛立ち〉、自己正当化のために自分の過去を語る態度についての「私」の嫌悪や拘りが語られていくという展開に、よく繋がっている。

以上のように、〈女中の子〉は、非常に衝撃的な経験とそれに伴う強い負の感情について追究したい思いと結びついたモチーフとして『野火』と小説「女中の子」に採用され、作品全体のテーマに関わる重要な役割を果たしている。そして小説「女中の子」は、『野火』における〈女中の子〉の描かれ方との差異によっても、安田による「女中の子」の告白の仕方をめぐる「私」の〈苛立ち〉が中心になっている作品であると言えるのである。

結

本稿は大岡昇平「女中の子」について、〈女中の子〉・安田に対する「私」の特別な〈苛立ち〉に注目し、考察してきた。

「女中の子」は、大岡が戦争経験を基にして書いた他の小説と比較して、亡き戦友への鎮魂的感情が表現されていない点で、特異な小説である。「私」が安田のことを否定的に捉えて語っている理由の一つは、安田が阿諛者である点にある。ただし、阿諛者についてはその人物の長所を捉えて語らないという意味で厳しく批判するという特徴は、小説「暗号手」にも共通している。その「暗号手」においては、「私」は亡き戦友・中山への鎮魂的感情を明示的に語っている。したがって、安田に対する「私」の特別な〈苛立ち〉は、阿諛者に対する特に厳し

い批判という以上の意味を持つと考えられる。

「私」は、安田による「女中の子」の告白に、自己の劣等感を過去の境遇のせいにして正当化する態度を見て取り、それを強く嫌悪しているのであった。「私」は、自己正当化を図って「告白」をしたと見える安田について、ただ阿諛の性質を批判する時にはまだ行えていた感情の抑制も出来ず、〈苛立ち〉を露わにしている。

〈女中の子〉が、大岡にとつて、人間のありようを追究するためのモチーフとして重要であったことは、〈女中の子〉・永松が登場する『野火』と、〈女中の子〉・安田が登場する「女中の子」という二作品の存在に窺える。二作品において、〈女中の子〉は、非常に衝撃的な経験とそれに伴う強い負の感情について追究したい思いと結びついたモチーフとして、作品全体のテーマに関わる役割を果たしている。そして小説「女中の子」は、『野火』における記述には見られるユーモアが無い点などからも、「私」の安田に対する抑え難く余裕のない〈苛立ち〉が中心になっている作品であると言えるのである。

大岡は、日常社会の延長線上に戦争を捉え、人の根底にある認識や態度を追究しようとしていた。その大岡において、自分の境遇を卑屈に捉えたくない、自己正当化のために過去を語りたくないという問題は、人のあり方の問題として重要であった。その問題意識を、「女中の子」の告白に関する「私」の特別な〈苛立ち〉によって表現したのが、小説「女中の子」なのである。

注

- (1) 本稿における大岡昇平の著作の引用は全て『大岡昇平全集』二三巻別巻一（筑摩書房、平成六年一〇月／平成一五年八月）に拠る。引用の末尾に全集の（巻数〔丸数字〕、頁）を記し、注に初出を記す。

- (2) 池田純澄「大岡昇平『野火』の研究―改稿を中心として―」(『文学・語学』(六五)、昭和四七年九月)一二五頁。
- (3) 『野火』は、初め『文体』(三)、(四)(昭和三年二月、昭和四年七月)に発表されたが、同誌の廃刊に伴い中断。改めて『展望』(六一)～(六八)(昭和二年一月～八月)に全八回連載された。初刊(創元社、昭和二年二月)。
- (4) 石崎等「大岡昇平の〈戦争〉Ⅲ―書くことの自覚とその戦略」(『藝文攷』(二二)、平成二八年二月)六二～六五頁。
- (5) 同注(4)六八頁。石崎氏は、大岡が安田を「阿諛者として軽蔑して」いることに言及している(同注(4)六四頁)が、作品内の阿諛に関する記述そのものについて詳しい分析はなされていない。本稿では、大岡の他作品との比較も踏まえて追究することとする。
- (6) 花崎育代「戦後の出発―『俘虜記』『武蔵野夫人』『野火』」(花崎育代『大岡昇平研究』双文社出版、平成一五年一〇月)一四～一五頁。初出(『国文学』(二三)、昭和五九年二月)。
- (7) 林姿登「大岡昇平『サンホセの聖母』の意味」(『阪大近代文学研究』(一六)、平成三〇年三月)四七頁。
- (8) 『襲撃』(『新小説』五(五)、昭和二五年五月)。初収録『サンホセの聖母』(作品社、昭和二五年六月)。
- (9) 『西矢隊始末記』における戦死者の描かれ方については、拙論「大岡昇平・初版『俘虜記』―いかにして自分が描へられたか―を〈精密に〉語る―」(『論究日本文学』(一〇五)、平成二八年十二月)で論じた。
- (10) 『靴の話』(『小説界』二(一)、昭和二四年二月)。原題「靴と食欲」。「サンホセの聖母」(作品社、昭和二五年六月)収録の際に「靴の話」と「食欲について」の二編に分割・改稿された。
- (11) 同注(10)を参照。
- (12) 『忘れ得ぬ人々』(『別冊文芸春秋』(三四)、昭和二八年六月)。初収録『ミンドロ島ふたたび』(中央公論社、昭和四四年二月)。
- (13) 『パロの陽』(『作品』(二)、昭和三年八月)。原題「レイテの雨」。「俘虜記」(創元社、昭和二七年二月)収録の際に「タクロパンの雨」と「パロ

- の陽」の二編に分割・改稿された。
- (14) 花崎育代「大岡昇平『俘虜記』における同胞の描き方」(『湘南文学』(一六)、平成一五年一月)一七五頁。
- (15) 『暗号手』(『風雪』四(二)、昭和二五年二月)。初収録『サンホセの聖母』(作品社、昭和二五年六月)。
- (16) 石崎等氏、同注(4)六四頁。
- (17) 『母』(『中央公論 文芸特集』(八)、昭和二六年六月)。初収録『母』(文芸春秋新社、昭和二七年六月)。
- (18) 『父』(『文芸春秋』二九(二)、昭和二六年八月)。初収録『母』(文芸春秋新社、昭和二七年六月)。
- (19) 『少年』(季刊誌『文芸展望』創刊号～夏季号第一〇号、昭和四八年四月～五〇年七月、全一〇回連載)。初刊は筑摩書房、昭和五〇年十一月。
- (20) 同注(12)。
- (21) 吉田熙生「市民としての大岡昇平」(『国文学 解釈と鑑賞』四四(四)、昭和五一年四月)九八頁。
- (22) 『僕と戦争もの』―これから何故「武蔵野夫人」を書くか―(①『夕刊世界経済』(二三〇七)、昭和二五年三月二三日。②『産業経済新聞』(大阪) (二七一六)、昭和二五年四月二五日)。
- (23) 『新しき俘虜と古き俘虜』(『文芸春秋』(二八(二二)、昭和二五年九月)。
- (24) 花崎育代『俘虜記』における〈恥〉の意味」(花崎育代『大岡昇平研究』双文社出版、平成一五年一〇月)五七頁。初出(『近代の文学 井上百合子先生記念論集』、河出書房新社、平成五年八月)。

付記

引用中の傍線は筆者(谷川)による。引用中の旧字は新字に改めた。／は改行を表す。

(本学大学院研修生)